

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285149

研究課題名(和文) リスク社会における若者の意識と将来社会の構想-第3回高校生調査の実施-

研究課題名(英文) The Consciousness of Japanese Youth and the Design of Future Society in the Risk Society: The Third Survey of High School Students Based on Questionnaire

研究代表者

友枝 敏雄 (Tomoeda, Toshio)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：30126130

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：2001年以来6年ごとに実施してきた高校生調査(質問紙調査)の第3回調査を2013年に実施した。第3回調査は、福岡県(7校)、大阪府(9校)、東京都(10校)で実施し6092名分のデータを収集した。第3回高校生調査の特色は、第1に、福岡、大阪のみならず東京で実施することによって、より日本社会の縮図となるようなデータの収集に努めたこと、第2に、東日本大震災をふまえて、科学技術と社会のあり方に関する高校生の意識を分析したことにある。

データ分析の結果、(1)規範への同調傾向の強まり、(2)政治的態度における保守化の進行、(3)理系クラスで原発支持者が多いことという興味深い知見が得られた。

研究成果の概要(英文)：We conducted high school students survey based on questionnaire every 6 years since 2001. In 2013 the third survey was carried out in three prefectures; Fukuoka(7 schools), Osaka(9 schools) and Tokyo(10 schools). We collected the data of 6092 students. Features of the third high school students survey can be reduced to following two points. Firstly, by carrying out survey in Tokyo as well as Fukuoka and Osaka, we tried to bring the collected data to be representative of the Japanese society. Secondly, in light of the Great East Japan Earthquake, we analyzed the consciousness of high school students about the role of science and technology in society.

The results of data analysis are as follows, (1) strengthening of conformity to the norm, (2) progress of the conservatism in political attitude, (3) The approval rating for nuclear power generation of science course students is higher than that of the other course students. These are interesting and suggestive findings of our survey.

研究分野：社会学

キーワード：高校生 規範意識 社会観 保守意識 ジェンダー観 リスク認知 科学技術と社会 震災・原発リスク

1. 研究開始当初の背景

いつの時代であれ、いかなる社会であれ、若者は次代を担う存在である。若者は現状の批判者であり、現状からの逸脱者である。と同時に新しい文化の創造者でもある。

ひるがえって第二次世界大戦後の日本社会をふりかえってみると、戦後復興からバブル経済が崩壊する 1990 年代前半までの日本社会は、総じてそれなりの安定性を保持した社会であった。しかるに「失われた」10 年を経て 21 世紀を迎えると、格差問題が深刻化し、非正規雇用労働者は増加の一途をたどっている。急激な少子高齢化は社会保障費を増大させ、国家財政は危機的状況にある。他方、国際関係に目を向ければ、中国経済の進展は日本の産業構造の空洞化に拍車をかけている。このような状況のなかで 2011 年 3 月 11 日に、東日本大震災が起こった。

まさしく閉塞状況にあり、将来社会に明るい展望を持つことが困難な現状は、日本社会が「第一の近代から第二の近代へ」と突入し、ドイツの社会学者ベックのいう「リスク社会」になったことを示している。リスク社会において、日本の若者は、いかなる社会観、公共性観、職業観、政治的態度を持っているのであろうか。

社会学は近代西欧に誕生して以来、現実社会に関する手堅い実証分析を通して社会問題を解決し、将来社会に向けてよりよい社会を構想することを学の使命としてきた。

本研究は、「若者の意識」という「1 つの物差し」によって、日本社会の現状と将来を解明しようとするものであり、日本社会をフィールドとして、社会学の使命である「よりよい社会」を構想する試みである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、若者の意識の計量的・実証的分析をベースにして、将来社会のグランドデザインを試みるものであり、高校生を対象とした意識調査の実施、若者の意識の研究、将来社会の構想という 3 つの研究を遂行する。

高校生を対象とした規範意識調査の実施

私たちの研究チームは、2001 年に福岡県で第 1 回高校生調査を実施して以来、6 年後の 2007 年には第 2 回調査を福岡県と大阪府で実施してきている。2007 年から 6 年経った 2013 年に第 3 回高校生調査を実施することにした。

第 3 回高校生調査の概要は、以下の通りである。

第 3 回高校生調査

調査対象者：福岡県の高校 2 年生 7 校
大阪府の高校 2 年生 9 校
東京都の高校 2 年生 10 校

これまで実施してきた福岡県、大阪府に加えて東京都でも実施して、日本社会の高校生の縮図となるような調査とした。

第 3 回高校生調査で質問した項目は、過去 2 回の調査を継続する部分と新規に加える部分とからなる。継続する部分では、高校生の規範意識や社会観などの質問項目を中心にしており、12 年間にわたる 3 時点のデータ分析によって、2000 年代における我が国の高校生の意識の変化した部分と変化しなかった部分とを浮き彫りにする。新規に加える質問項目としては、3.11 東日本大震災を念頭において、リスク社会において、原子力発電に代表される科学技術のあり方やリスク認知の仕方に関するものを用意した。

若者の意識の研究

高校生調査データの計量分析から得られた知見を出発点にして、若者の意識の特性を解明する。意識の特性として焦点化するの、次の 3 つである。第 1 は、若者の規範意識および政治的態度であり、第 2 は、若者の社会観および将来展望であり、第 3 は、原子力発電に象徴的に示される科学技術と社会のあり方についての若者の意識である。

将来社会の構想

1. 2. の作業をふまえて、将来社会のグランドデザインを行う。若者はいかなる人間関係のあり方(ネットワーク形成)社会観、ジェンダー観をのぞんでいるかを明らかにした上で、それを実現するような将来社会の姿をデザインする。

3. 研究の方法

本研究では、以下の 5 つの課題を遂行する。

第 3 回高校生調査の実施とその計量データの分析

1. 調査票の設計

調査票の継続部分と新規追加部分とは以下のような構成になる。

(1) 継続部分

日常生活場面での規範意識
勉強・学歴観と友人関係
進路選択
地位達成志向・職業観
政治的態度
性別役割分業意識・ジェンダー観

(2) 新規追加部分

リスク認知
科学技術と社会のあり方
東日本大震災についての自由記述
2. 3 地域(福岡県・大阪府・東京都)での調査の実施
3. 調査票の回収と点検・コーディング
4. 単純集計表の作成とデータ分析
データ分析の主たるテーマは以下の通りである。

高校生の規範意識の内実は何か
若者の人間関係の結びつき方
高校生の進路選択
高校生地位達成志向と職業観
高校生の政治的態度(保守化の進行)

高校生の性別役割分業意識・ジェンダー観
リスク認知
高校生の震災・原発に対する意識
第1回・第2回・第3回高校生調査データ
を用いた時点間比較と地域間比較
高校現場への聞き取り調査
若者意識からみた社会の変動
高校生調査データの分析を通して、若者の
意識の変化を明らかにする。
将来社会の構想
若者の意識の変化をふまえて、将来社会を
構想する。高校生調査データの計量分析から
焦点化されるのは、次の3つである。
高校生における意識の保守化
高校生の人間関係の結びつき方
科学技術と社会のあり方

4. 研究成果

(1)2013 高校生調査データの計量分析および
第1回・第2回・第3回高校生調査データの
時点間比較・地域間比較によって、以下の7
点が明らかになった。

規範意識の上昇と規範への同調傾向の高
まり。

高校生の人間関係は、必ずしも希薄化して
いないこと。

地位達成志向の高まり。

政治的態度における保守化の進行。

雇用不安が、女性の就労意識を高め、その
結果、性別役割分業意識が弱まるかもしれな
いこと。

非正規雇用リスク認知は、高校生の所属集
団における相対的地位が低いと高まること、
つまり学業成績が悪く、友人数の少ない高校
生は非正規雇用リスク認知を強く感じるこ
と。

原発支持は、理系クラスおよび男子生徒に
おいて高いこと、したがって理系以外のクラ
スおよび女子生徒では、原発に反対する意見
が多いこと。

(2) 教育現場への聞き取り調査、教育現場で
フィールドワークを実施している研究者への
ヒアリングにより、以下のような若者の意
識の変動が明らかになった。

2000年代以降、若者は「逸脱」への憧れを
弱め、規範への同調性を強めていること、こ
の原因として、次の2つが考えられる。1つ
は、日本社会の将来に対する不安が若者をリ
スク回避の手段として「お利口」にさせ、規
範への同調を強めていること、もう1つは、
1990年代以降の中学校を中心とした管理教
育の進展が、「いじめ」を避けるという目的
とも合致して、若者の規範への同調傾向を強
めていることである。

(3)2016年から18歳選挙権が実施されるこ
ともあり、将来社会を構想するためには、まず
若者に、将来の共生社会に備えて「シテイズ

ンシップ」教育を行うこと、このような教育
実践を通して、新しい家族のあり方、地域社
会のあり方、労働のあり方を提示していくこ
とが重要であるという結論に達した。いうま
でもないが、将来の共生社会とは、従来の個
人主義にもとづくものでもないし、これまで
の共同体の復活でもない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計 16 件)

友枝敏雄「社会学の立場から正義を考
える」『適塾』査読無,46号,2013年,pp.12-19.
友枝敏雄「大学教育における質保証と参
照基準」『ソシオロジ』査読無,第59巻2
号,2014年,pp.101-103.

友枝敏雄「書評 橋爪大三郎編『小室直
樹の世界』」『社会学評論』査読無,第65
巻2号,301-303.

友枝敏雄「第二の近代における民主主義」
『学術の動向』査読無,第20巻3号,85-87.

友枝敏雄「書評 盛山和夫著『社会学の
方法的立場』」『社会学評論』査読無,第65
巻4号,611-612.

Ozawa, W., Makita, Y., Higuchi, K.,
Nishimura, K., Ishikawa, K., Ogawa, H.
& Kato, H., "The Local Community
Volunteer Social Worker System in
Japan: Analysis of Survey Data" 『立命
館産業社会論集』第50巻3号,2015
年,pp.61-75.

樋口耕一「フリーソフトウェア『KH
Coder』による計量テキスト分析—手軽
なマウス操作による分析からプラグイン
作成まで」『情報処理学会研究報告. 人文
科学とコンピュータ研究会報告』査読無,
2015-CH-107(9): pp.1-2.

永井美紀子・山田真茂留「個人化社会に
おける宗教的集合性 - アメリカ的文脈把
握の試み - 」『年報社会学論集』,査読
有,27号,2014年,pp.134-145.

永井美紀子・山田真茂留「現代宗教とそ
の集会的様相」『社会学年誌』,査読有,56
号,2015年,pp.61-75.

Ikuya Sato, Manabu Haga, and Mamoru
Yamada, "Lost and Gained in Translation:
The Role of the 'American Model' in the
Institution-Building of a Japanese University
Press." Cultural Sociology, 9(3), September,
2015年,pp. 347-363.

阪口祐介「犯罪リスク認知の規定構造の
時点間比較分析 - 犯罪へのまなざしの過
熱期と沈静化期 - 」『犯罪社会学研究』,
査読有,38(2),2013年,pp.153-169.

平沢和司・古田和久・藤原翔「社会階層
と教育研究の動向と課題」『教育社会学研
究』,査読無,93号,2013年,pp.151-191.

石田浩・有田伸・藤原翔・朝井友紀子「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 (JLPS) 2013」からわかる若年・壮年者の希望・仕事・喫煙」『中央調査報』, 査読無, 680号, 2014年, pp.1-9.

藤原翔「書評 竹ノ下弘久著 『仕事と不平等の社会学』弘文堂」『理論と方法』, 査読無, 56号, 2015年, pp.377-380.

藤原翔「教育意識の個人間の差異と個人内の変化 - 「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 (JLPS) データを用いた分析 - 」『社会と調査』, 査読無, 15号, 2015年, 40 - 47.

Sho Fujihara and Hiroshi Ishida “The Absolute and Relative Values of Education and the Inequality of Educational Opportunity: Trends in Access to Education in Postwar Japan” Research in Social Stratification and Mobility, 査読有 (印刷中), 2016年, doi:10.1016/j.rssm.2016.03.001.

〔学会発表〕(計 20 件)

友枝敏雄「3 時点における高校生の規範意識・社会観の変化」(第 72 回西日本社会学会大会, 西南学院大学, 2014 年 5 月 10 日)

友枝敏雄「第 3 回高校生調査の概要と保守化の趨勢」(第 65 回関西社会学会大会, 富山大学, 2014 年 5 月 24 日)

友枝敏雄「第二の近代における公共性と正義」(第 73 回西日本学会大会, 山口県立大学, 2015 年 5 月 16 日)

樋口耕一「自由回答項目によるマイクロインタビューと通常項目による線形モデルとの連携 - 質問紙調査の分析事例から - 」(第 41 回日本行動計量学会第, 東邦大学, 2013 年 9 月 5 日)

樋口耕一「テキストマイニングの基礎 - 文書データの統計解析 (チュートリアルワークショップ) - 」(第 77 回日本心理学会大会, 札幌コンベンションセンター, 2013 年 9 月 19 日)

樋口耕一「KH Coder による計量テキスト分析 - アンケート自由回答の分析を中心に - 」(第 17 回日本水環境学会シンポジウム 滋賀県立大学, 2014 年 9 月 9 日)

樋口耕一・阪口祐介「現代の高校生を脱原発へと向かわせるもの」(第 65 回関西社会学会大会, 富山大学, 2014 年 5 月 25 日)

樋口耕一「質的データのより幅広い活用を目指しての方法的検討とソフトウェア開発」(第 56 回日本教育心理学会総会, 朱鷺メッセ(新潟市), 2015 年 8 月 26 日)

阪口祐介「現代青少年の文化と意識 - メディアと生活の相互関係の変容 - 」(第 86 回日本社会学会大会, 阪口祐介, 「現代青少年の文化と意識 - メディアと生活の相互関係の変容」第 86 回日本社会学会大会, 慶応大学, 2013 年 10 月 12 日)

阪口祐介「現代高校生における震災・原発リスクに関する意識の規定構造」(第 65 回関西社会学会大会, 富山大学, 2014 年 5 月 25 日)

阪口祐介「原発に対する態度の規定構造」(第 87 回日本社会学会大会, 神戸大学, 2014 年 11 月 23 日)

藤原翔「高校生の進路選択のメカニズム - 学歴に対する評価を用いた計量分析 - 」(第 64 回関西社会学会大会, 大谷大学, 2013 年 5 月 19 日)

Sho Fujihara “An Empirical Test of the Breen - Goldthorpe Model of Educational Decision: Class Origins, Subjective Evaluations, and Educational Expectations of Japanese Students.” (International Sociological Association Research Committee on Social Stratification RC28 Conference, プリスベン, オーストラリア, 2013 年 7 月 19 日)

Sho Fujihara, “An Empirical Test of the Relative Risk Aversion: Occupational and Educational Expectations of Japanese Students” (The 108th Annual Meeting of the American Sociological Association, ニューヨーク, アメリカ合衆国, 2013 年 8 月 10 日)

石田浩・藤原翔・有田伸・大島真夫・石田賢示「学歴の職業的収益と教育機会: 東大社研パネル調査 (JLPS) と SSM データの分析」(第 66 回日本教育社会学会大会, 愛媛大学・松山大学, 2014 年 9 月 13 日)

藤原翔「子どもへの教育期待に対する教育意識・社会意識の効果: 東大社研パネル調査 (JLPS) データの分析 (2)」(第 87 回日本社会学会大会, 神戸, 2014 年 11 月 23 日)

Sho Fujihara and Hiroshi Ishida, “Education as a Positional Good and Inequality of Educational Opportunity: Trends in Access to Education in Postwar Japan” (International Sociological Association Research Committee on Social Stratification RC28 Conference ブダペスト, ハンガリー, 2015 年 5 月 10 日)

Sho Fujihara, “The Effects of Changes in Objective Social Status on Changes in Subjective Social Status in Japan” (International Sociological Association Research Committee on Social Stratification RC28 Conference, ティルブルグ オランダ, 2015 年 5 月 30 日)

藤原翔「進路選択の社会経済的格差の説明: Breen and Goldthorpe Model の検証」(第 67 回日本教育社会学大会, 駒澤大学, 2015 年 9 月 9 日)

木村好美「高齢期のライフスタイル選択としての海外移住 - マレーシアにおける口

ングステイヤーへのインタビュー調査より」(第57回日本老年社会科学大会, パシフィコ横浜, 2015年6月13日)

(特記事項)

上記の通り、学会発表は20件あるが、
樋口耕一・阪口祐介「現代の高校生を脱原発へと向かわせるもの」(第65回関西社会科学大会, 富山大学, 2014年5月25日) および 阪口祐介「現代高校生における震災・原発リスクに関する意識の規定構造」(第65回関西社会科学大会, 富山大学, 2014年5月25日) に対しては、若手研究者の優れた学会発表ということで、**関西社会科学会奨励賞**が授与されている。

[図書](計 13 件)

友枝敏雄(共編著)・山田真茂留・宮島喬・船橋晴俊・遠藤薫他『グローバルゼーションと社会学』ミネルヴァ書房, 2013年, 322頁

友枝敏雄・樋口耕一・山田真茂留・阪口祐介他『リスク社会を生きる若者たち』大阪大学出版会, 2015年, 2491頁

友枝敏雄・江原由美子・奥村隆・笹谷春美他『社会学教育って何だ - 「社会学分野の参照基準」から考える - 』, 日本社会科学会, 2016年, 102頁

樋口耕一『社会調査のための計量分析 - 内容分析の継承と発展を目指して - 』ナカニシヤ出版, 2013年, 233頁

樋口耕一・石田基広・神田善伸他『Rのパッケージおよびツールの作成と応用』共立出版, 2014年, 212頁

山田真茂留他『組織論レビュー - 外部環境と経営組織 - 』白桃書房, 2013年, 248頁

山田真茂留・船津衛・浅川達人他『21世紀社会とは何か - 「現代社会学」入門 - 』恒星社厚生閣, 2014年, 234頁

山田真茂留・井上俊他『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』世界思想社, 2014年, 272頁

阪口祐介・田辺俊介他『民主主義の危機 - 国際比較調査からみる市民意識 - 』勁草書房, 2014年, 287頁

阪口祐介・成元哲他『終わらない被災の時間 - 原発事故が福島中通りの親子に与える影響 - 』石風社, 2015年, 281頁

阪口祐介・藤村正之・浅野智彦・羽淵一代他『現代若者の幸福』恒星社厚生閣, 2016年, 222頁

藤原翔・筒井淳也・長松奈美江他編『計量社会学入門』世界思想社, 2015年, 284頁

藤原翔・中澤涉編『格差社会の中の高校生』勁草書房, 2015年, 184頁

[産業財産権]
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:平成 年 月 日
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:平成 年 月 日
取得年月日:平成 年 月 日
国内外の別:

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

友枝敏雄 (Tomoeda, Toshio)
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号: 30126130

(2) 研究分担者

樋口耕一 (Higuchi, Koichi)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号: 00452384

山田真茂留 (Yamada, Mamoru)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 20242084

阪口祐介 (Sakaguchi, Yusuke)
桃山学院大学・社会学部・准教授
研究者番号: 50589190

藤原 翔 (Fujihara, Sho)
東京大学・社会科学研究所・准教授
研究者番号: 60609676

木村好美 (Kimura, Yoshimi)
早稲田大学・文学学術院・准教授
研究者番号: 90336058

